

「ローコード・ノーコード製品を利用した情報システム開発に関する調査」



調査結果
2024年4月

一般財団法人経済調査会 調査研究部 第二調査研究室
ITシステム可視化協議会 (MCIS) ローコードノーコード開発SIG



「ローコード・ノーコード製品を利用した情報システム開発に関する調査」



調査概要

調査の目的・背景

調査の背景

環境の変化に合わせて柔軟に事業を変革していくためには、情報システムについても、企画から開発までの期間を短縮し、実証実験のフィードバックを反映しやすい計画を立てる必要があります。そのためには、業務知識を有する事業部門の関与が必要であると同時に、実装技術に関する知識がない事業部門の担当者でも利用可能な開発ツールが求められています。

調査の目的

日本国内でのローコード・ノーコード製品を利用した情報システム開発の実態を把握すると同時に、ローコード・ノーコード製品を利用した内製化の状況を把握することを目的に調査を企画・実施しました。

調査概要

調査対象

東証上場企業等の民間の大手企業を中心としました。協力依頼の件数は以下のとおりです。

1,072組織

◎郵送による依頼……968

◎メールによる依頼……134 (郵送との重複30)

調査期間

2023年10月30日～2023年11月13日

回答数

54組織

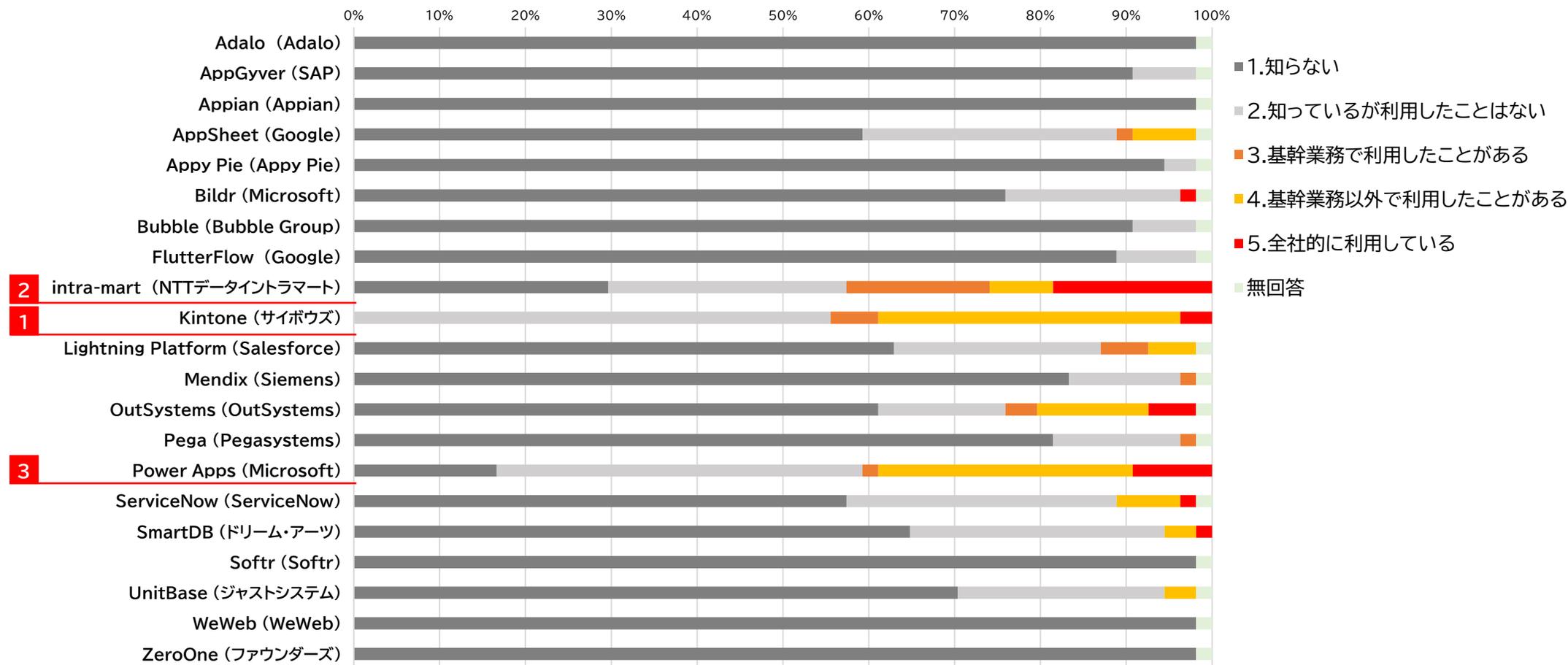
「ローコード・ノーコード製品を利用した情報システム開発に関する調査」



調査結果

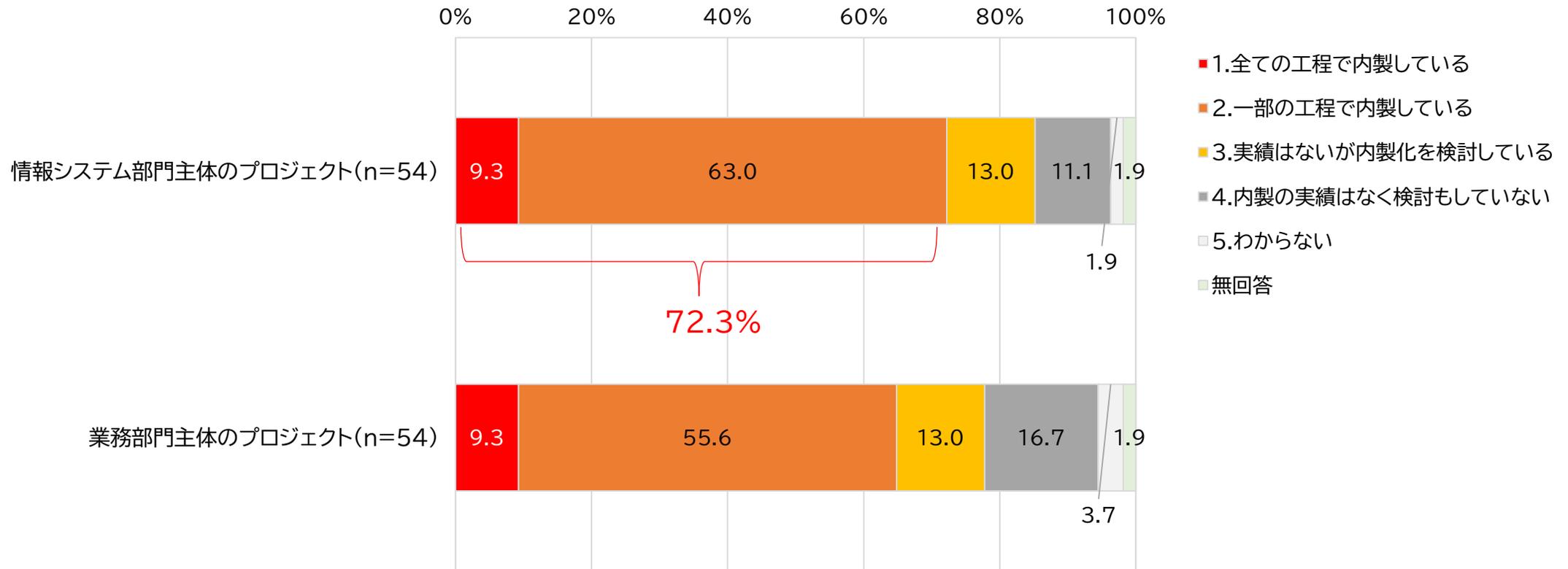
ローコード・ノーコード製品の認知状況・利用状況

調査対象企業で最も利用されていたのはKintone、intra-mart、Power Appsでした。



ローコード・ノーコード開発における内製化の取組状況

情報システム部門主体のプロジェクトでは、内製化率が約7割でした。ただし、対象工程は一部が大半でした。



導入に関する現状認識、課題、将来の不安・展望

自由回答を集計した結果、現在の課題、将来の不安・展望ともにガバナンスに関する記載が最多でした。コスト・生産性と併せて、関心が高い事が伺えます。(詳細後述)

カテゴリ	現状認識	現在の課題	将来の不安・展望	合計
ガバナンス	-	5	4	9
コスト・生産性	-	3	2	5
バージョンアップ/製品サポート	-	0	2	2
人材育成	-	2	0	2
BPR	-	1	0	1
ユーザビリティ	-	1	0	1
製品選定	-	1	0	1
他シス連携	-	0	1	1
標準化	-	1	0	1
分類不可 (感想めいたもの)	3	-	-	3

ガバナンスに関する現在の課題、将来の不安・展望

開発ルールや資産管理に加えて、データガバナンスも課題との認識でした。

現在の課題

- 野良化と内部統制上の問題があり、仕様書が不十分になったりしないよう運用ルールの徹底が重要
- 業務部門主体の開発時の運用ルールや権限設定が甘く、試行の延長線で利用させてしまっている
- 過去もうまく継承できずアプリが野良化し負債となった経緯あり、きちんと教育をして進めたいが手が回らないことも多い
- 業務部門が製品ベンダーやリセラーの営業ストックに踊らされて導入し統制が効かず、いろいろな製品を導入したものの、業務部門リードで導入したものはその後運用が上手くいっていない事が多い

将来の不安・展望

- 開発の標準化、ルール化が難しく、野良システムが出来ないように管理するのも難しいが、一過性のブームにならないか不安
- 基幹システムのデータをどこまで、どのように開放するか難しい
- 取組みやすさ故に、それぞれの部署で内容が類似したまたは重複したものが作られてしまい、データの一元化から遠ざかってしまうことを危惧

コスト・生産性に関する現在の課題、将来の不安・展望

開発人材の不足や品質担保に課題があり、開発を進めるにあたっては知見が必要との認識でした。
生成AIに対して期待する一方、人が作った機能とAIが作った機能が分かるような仕組みも必要との認識でした。

現在の課題

- 作ろうと思えば何でも作れるが、より適切な適用範囲・作り方・定量指標がなく、大変苦勞している。
ローコード開発の普及には、進め方のベストプラクティスや設計パターンといった知見が必要
- ローコード開発を一気通貫で実現できる人材が不足しているため、役割が細分化されコミュニケーションに多くの時間が取られたり、仕様制約を加味した設計が出来ず工期遅延やコスト増となるケース散見
- 作りたいものが決まっていれば開発未経験者でもそれなりのものが作れる印象があるが、ある一定以上の規模になるとライセンス費用がかかりがち

将来の不安・展望

- 生成AIと連携するローコードノーコード製品が出始めているが、人が設定した部分と、生成AIによる出力で設定した部分の違いについて、第三者（監査人等）にも分かるような仕組みが必要と感じる
- 将来のバージョンアップやシステム変更に対応する場合コスト、時間、人員が必要となる懸念あり

「ローコード・ノーコード製品を利用した情報システム開発に関する調査」



調査結果をふまえた考察

ローコード・ノーコード開発は内製化に有効だが課題もあり

ローコードノーコードは一定程度普及しているものの、より良い手法や方法論の確立が求められていると考えます。ローコードノーコード開発SIGでは課題解決に向けた活動を2024年度も推進していく予定です。

製品の 認知状況 利用状況

- 他種多様な製品が導入されているが、一般的な調査の結果よりも国産製品が優勢な結果
- 製品のネームバリューと実際の導入実態は必ずしも一致しないものと想定

内製化の 取組状況

- 民間の大手企業ではローコード・ノーコード開発における内製化が進んでいる
- システム内製化は情報システム部門主体が先行しているが、事業部門主体も今後増加するものと想定
- 普及状況から鑑みると、内製化の手段としてローコード・ノーコード開発は一定効果が見込めると想定

現在の課題 将来の不安・展望

- ガバナンス、及び生産性・コストが主な関心事
- システムの野良化、データ散在など、ガバナンス課題は顕在化しつつあるため、対策が必要
- より高い品質を求められるシステム領域に適用するには、生産性指標や設計パターンといった知見を組織を超えて蓄積・共有する事が求められているものと想定